

〈要旨〉

ベリーズの独立と 「パディージャ=ネルボ・コロラリー」の提唱

イサミ・ロメロ=ホシノ

1958年10月6日、国連総会においてルイス・パディージャ=ネルボ墨外相は、英領ホンジュラス（ベリーズ）の独立に対するメキシコ政府の正式な立場を表明した。そこで、ベリーズ領土の一部は、メキシコが「歴史的な権利」があると主張し、そのステータスが近い将来変われば、自国がベリーズ領土の権利を要求すると明らかにした。ただし、自国は、メキシコ革命の外交原則に従ってベリーズ国民の民族自決を尊重すると強調し、英領ホンジュラスの人々が独立の道を選択した場合、メキシコはその意思を尊重すると指摘した。

本稿では、この外交演説のことを「パディージャ=ネルボ・コロラリー」と定義する。メキシコ政府はどのようにコロラリーの提唱を選択したのだろうか。この問題を体系的に分析してきた研究は存在しない。ただし、ヘナロ・エストラダ外交資料館の資料を調べてみると、コロラリーの提唱はベリーズに対するグアテマラの急進主義に対抗する為の政策であったと考えられる。その意味で、1958年の演説は、決して理想的な外交原則に基づいたわけではなかった。

そこで、本稿では、どのようにコロラリーが形成され、当時の意思決定者の影響について検討する。その際、メキシコの独立まで遡り、メキシコ、英国、英領ホンジュラス、グアテマラの駆け引きの史的分析を行う。これ

を通じて今までのメキシコ外交史研究に忘れられた墨・ベリーズ関係の重要性を強調したい。